
魔法少女リリカルなのは ~ 憎悪の戦士と神龍の騎士 ~

japan17

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～憎悪の戦士と神龍の騎士～

【Nコード】

N4707Y

【作者名】

japan17

【あらすじ】

一人の少年は魔法を持つ者達により家族を失い、代わりに果てしない憎悪の心を手に入れた。

一人の少年はいくつかの力を残し、他の全てを失った。家族となった二人の少年は出会う。

願いを叶える宝石と、それを求める少女達と。

それは、果てしない闘いの始まり。

憎悪の心を持つ少年の救済と、思い出を失った少年の再生を促す闘いの始まりだった。

始まり 〜プロローグ〜 (前書き)

どうも。

Japan17です。

はじめましての人も、「なんだ、お前か」って人もどうもです。

作者の厨二とりりなの好きのせいで、投稿しました。 まだ、デビュー作も完結してないのに……。

とまあ、こんな駄目作者の作品ではありませんが、どうか温かい目で見ていただけたらと思います。

では、超短いプロローグをどうぞ。

始まり　くプロローグく

くプロローグく

記憶力には自信がある。

だから、今でも時々夢に見る。

あの日、業火の中。　血の海に沈んだ父と母の身体を。

それを呆然として眺めていた自分を。

それが、「魔法」と呼ばれる力を使う連中による仕業だということも。

その日から僕の中にこの感情が生まれたことも。

限り無い、憎悪の心が生まれたことも、今でもよく覚えている。

俺には、過去の思い出という物が無い。

気付いた時には、既に何も無かった。

思い出すことも出来ない。

かつては不安に駆られた。

だが、今はどうでもよくなっている。

血の繋がりこそ無いが、家族が出来たから。

だから、俺はこの力を使うんだ。

何も無い俺に唯一残された、
一対の神龍と共に闘うこの力を。

魔法少女リリカルなのは
憎悪の戦士と神龍の騎士

始まります。

始まり 〜プロローグ〜（後書き）

いかがでしたか？

短いでしょうか？

基本、更新は不定期ですが、がんばって書いていききたいと思うので、どうかよろしく願います。

それでは。

第一話「序曲」(前書き)

どうも。j a p p a n 1 7です。

早速、第一話を上げました。
例によって短いですが・・・。

では、さしあげ。

第一話「序曲」

「……………眠っ」

いつも通りの朝。僕、

「蓮丈^{れんじょう} 直哉^{なおや}」は、消えない眠気と共に目を醒ます。

まったく。この眠気だけはいつまで経っても慣れないよ。

なんてことを、柄にもなく考えてしまっ、小学三年生の僕、蓮丈直哉です。

「ライナは……………さすがに起きたか」

そう言い、僕はベッドから下り、制服に着替える。

着替えを終えて、鏡でおかしな所が無いか確認。それも終えて、最後に机の上に置かれた、縦長六角形の蒼い宝石……………母さんの形見を首から下げ、部屋を出る。

向かうは一階。朝食の準備をしているであろう、同居人 正確には、僕の家族の下へと向かう。リビングに入ると、味噌汁の良い匂いがしてきた。

「ライナ、おはよう」

台所にいる家族に声をかける。

「ああ、直哉か。おはよう」

そう僕に挨拶を返す少年の名は「ライナ」。

わけあって、この家で一緒に暮らしている。

歳は僕の二つ上だ。

挨拶を終えてテーブルを見ると、もう既に食事のほとんどが用意してあった。

「ごめんな。いつもご飯の用意、一人でやらせて」

「本当にそう思うなら、もっと早く起きろ」

「それは無理。僕、低血圧だもん」

そんな他愛の会話と共にライナを手伝いながら、席に着く。

献立は、焼魚におひたし、たくあんに大根の味噌汁か。いつもながら美味そうだ。

「あ、そうだ直哉」

「ん〜？『アルビオン』と『ヴリトラ』なら、まだ寝てると思うよ？」

「・・・そうか」

席に着いた後、そんな会話が広げられる。アルビオンとヴリトラとは・・・まあ、我が家のペットみたいなものだが、2匹については、またいつか。

「じゃあ、そろそろ・・・」

「ああ。だな」

二人で手を合わせる。

「いただきます」

私立聖祥大学附属小学校。そこが僕が通っている学校だ。

いつも通りの道を通り、いつも通りのバスに乗って、学校に向かう。

「おつす、直哉」

「おはよ〜」

爽やかな笑みを浮かべながら挨拶をする友人、

「進藤^{しんどう}蛸^{けい}」と、ちよつとゆるい雰囲気をもったもう一人の友人、

「日向^{ひなた}社^{やしら}」の二人とバスを降りたところで合流。一年生の頃から
の付き合いの親友達と共に、校舎へと向かう。

何も変わらない。

いつも通りの日常。

これまでも、これからも。

そう。変わらないはずだった。

この日の夜、あの声を聞き、彼と、そして何より。

彼女と出会い、忌み嫌っていた力を持つことになる、今夜までは。

第一話「序曲」（後書き）

いかがでしたか？

今回は掴みみたいな感じなので、W主人公と直哉の友人二人を出してみました。

ちなみに、蛭と社の立ち位置は、完璧にアリサとすずかです。

キャラ紹介なんかは、デバイスが出て、ある程度物語が進んだらにしようと思っています。

では、今回はこの辺で。

次回はなのはとユーノ出せるかなあ・・・。

第二話「不屈の心、憎悪の心」（前書き）

第二話投稿です。

思ったたよりも、筆が進むのなんの・・・おかげで、やたらと長く・・・はい。

まあ、それはさておき。

今回は、みんな大好き、魔王様と淫獣君が出てきます。

それでは、どうぞ。

第二話「不屈の心、憎悪の心」

いつも通りの日常。授業が終わり、皆が続々と教室から立ち去っていく。

かく言う僕もその一人だ。友人の蛍や社と一緒に、荷物をまとめて教室、そして校舎を出る。

「いや、やっぱり眠くなるよな、授業中」

「うん。わかるよ、その気持ち。どうしてあんなに眠くなるんだろ
うね、直哉？」

「いや、僕に振るなよ」

けどまあ、授業中は凄く眠いというのはよくわかる。僕だって、何
回落ちそうになったかわかったもんじゃない。

「それで？今日はどうする？ また蛍の家で人生ゲームでもするか
？」

「え。いいよ、人生ゲームは。ぶっちゃけ飽きたし」

「バツカ、お前。人生ゲームは人類の叡知が生み出した究極のボ
ードゲームだぞ！ あんなに奥の深いゲームなんて、世に2つと無え
んだぞ！ おわかり！？」

「「究極W」」

「キーンッ!!」

蛭が髪を掻きむしりながら絶叫する。いや、人生ゲームが面白いのは認めるけど、蛭ほどのめりこむのも、どうかと思うわけで。

そんな感じで蛭をいじりながら歩いていると、数人の女子グループが視界に入った。

「お。聖祥の三大美少女だ」

蛭の言葉に、僕達は足を止めてその3人を見る。

栗色の髪をツインテールにした女の子を中心に、左に金髪のロングヘアの子、右に紫色の、ウェーブがかかったロングヘアの子が並び、仲良さげに歩いていた。

「高町なのは、アリサ・バニングスに月村すずか・・・か」

その3人は、「聖祥の三大美少女」と呼ばれるほどに容姿が整っており、非公式ながらファンクラブが存在するとかしないとか。

「はあく。相変わらず近寄りがたいな、あの辺は」

「なに、蛭？近寄りたいの？」

「そりゃな。ちょっとは仲良くしたいとか思うわけで」

「でも、下手に言い寄ったりしてみなよ？ 非公式の連中にやられるよ?」

「そつなんだよなあ・・・」

「直哉は?」

「あ?」

「あの3人と仲良くしたいな?。とか、思ったりしないわけ?」

「・・・・・・」

同じクラスってだけで、他には接点も何も無いのに、仲良くする必要も無いしな。

「いや、僕は別に無いな。そつというのは」

「だってさ。諦めなよ、蛭」

「わ、わかってるよ」

蛭が目に見えて凹んでるな・・・・・・よし。

「・・・それにね」

「」「」「」

「別に、あの3人と仲良くしなくても、僕には蛭と社っていう最高の友達がいる。これ以上は欲張り過ぎだと思っんだ」

「……………」

「……あれ。言葉の選択間違った？」

「……直哉、お前ってヤツは……」

「え？」

「あはは……なんで、そんな恥ずかしいセリフをさらっと言えるんだろっね……」

「……うん。確かに恥ずかしい。顔が熱くなってるのがよくわかる。」

「ははっ。じゃあ、この後、俺の家行こうぜ」

「いいけど、俺も直哉も、人生ゲームはやらないよ？」

「わかってるよ。だから、それ以外のなにな」

「……………ああ。じゃ、速く行こうぜ、蛭、社！」

「おう！」

「あぁっ！ ちょっと待って！」

走り出す僕と蛍を慌てて追いかける社。

そうさ。

別に、わざわざ新しく友達を作る必要も、誰かと仲良くしておく必要も、どこにも無い。

大切な、大好きな友達がいる。

僕には、それだけで十分なんだから……。

「ただいまー」

すっかり暗くなった時間、僕は蛍の家から帰ってきた。ちょっとハッちゃけすぎたせいか、結構腹が減っている。

「帰ってきたのか。お帰り、直哉」

「ただいま、ライナ」

これから夕飯の準備でもするのだろつ。エプロンを着けたライナが出迎えてくれた。

『む。帰ってきたか』

『お帰り、直哉』

「ああ、アルビオン。ヴリトラも、ただいま」

リビングから出て来たのは、手の平サイズの大きさで、前後四本の脚と二枚の翼。長い尻尾にトカゲっぽい目と数本の角のある頭部を持つ、白と黒の生き物……。

所謂、「ドラゴン」って奴である。

白い方の名前が「アルビオン」、黒い方が「ヴリトラ」という名前だ。

どちらも、ライナがこの家に来た時には、既にライナと一緒にいた。

曰く、「ライナは自分達が仕える主」だそうだ。

まあ、疑う必要も無かったから、今では我が家のペット、家族の一員だ。

ちなみに、この家には、母さんの元同僚で、僕達の育ての親がいるが、基本仕事で家にいるのはごく稀だ。

余談だが、ある事情により、ライナは通信教育で普通の学校の授業を受けている。

「直哉。先に風呂に入ってきたらどうだ？ 夕飯が出来るまで、まだしばらくかかるから・・・」

やっぱり、そう言うと思ったた。

「いや、今日は僕がやるよ。ライナが先に風呂入っちゃって」

「・・・珍しいな。何か良いことでもあったのか？」

「まあね」

友達の素晴らしさを再確認してきたところだよ。

「じゃあ、任せていいか？」

言いながら、エプロンを僕に渡してくるライナ。

「ああ。お任せ」

「すまない。よし、アルビオン、グリトラ。風呂入るぞ」

『承知しました』

『あいよ〜』

そうして、みんなで風呂に向かっていく。

さて。献立は何にしようかな〜。。。

『……………れか』

「……………んあ？」

もう夜も更けたその日の晩。入浴も学校の宿題も終え、自室でくつろいでいると、不意に声のようなものが聞こえた。

「・・・気のせいかな？」

『誰か・・・聞こえますか・・・？』

また聞こえた。てか・・・！

「気のせいじゃねえぞこれ！」

反射的にベッドから跳び降りる。

「・・・何の声だ・・・？」

『誰か・・・この声が聞こえたら、力を貸してください・・・危機が、すぐそこに・・・』

「危機・・・？」

もう一度耳をすませてみるが、もう声は聞こえなかった。

「・・・行ってみるか」

もしかしたら危険なことが起こるかもしれない。

けど、誰かが困ってんなら、力を貸す！

蓮丈家家訓、第一条だ！！

「そうと決まれば、即行動！ 善は急げ！」

そう言つて、部屋のダンスから薄手のジャンパーをひっ掴んで羽織ると、僕は蹴破る勢いでドアを開き、外へ飛び出す。

「え、ちよつ、直哉!？」

「ごめん、ライナ! ちよつと出てくる!」

「出てくるって、今何時だと・・・おい!」

ライナの制止を聞き流し、僕はダッシュで声の主の下へと向かう。

場所などわからない筈なのに、自然と足は止まること無く、目的地・
・動物病院へと向かっていた。

「・・・なんじゃこりゃあ・・・」

思わず某俳優の名言を口にしてしまうほど、僕は目の前の光景に圧倒されていた。

なんてったって、馬鹿デカイ化物が暴れ回っているのだから。

「・・・違う、か」

そう、違う。

正確には、目を逸らしたかっただけなんだろう。だって、目の前で起きている現象の正体を一言で表すとしたら……。

「魔法……」

魔法。

マンガや小説でよくある力。

一般的には、炎や雷を操ったり、自然現象をも自由に起こせたりも出来る代物。

憧れたことが無いと言えば、嘘になる。

でも、僕が魔法に憧れた理由は……。

僕が魔法を求めた理由は……！

『うわああッ!!』

「!?!」

思考に囚われている内、目の前にいた怪物から逃げ回っていた、オレンジ色のネズミっぽいのがこっちに飛ばされてきた。

<ガスッ!>

「いぎつ?!」

避けきれずに、僅かながら足にかすめてしまったが、立てないほどのダメージじゃない。

『だ、大丈夫ですか!?!』

「ああ、なんとか・・・」

言いながら、ゆっくりと顔を上げていく。

「・・・・・・・・・・へ?」

「ふえ?」

顔を上げた先にいたのは、目と口を丸にして、呆けた顔でこちらを見つめる・・・

「……高町なのは？」

Sideなのは

な、なんだか凄いことになってるの……。

……はっ!？

あ、わ、私、高町なのはです。

お家でゆっくりしていたら、不思議な声が聞こえてきて、それどこに来たら、今日の夕方に助けたフェレットさんがおっきな怪物に襲われていたの。

「助けなきゃっ!」

って思ったんだけど、他に誰かが来て、フェレットさんと一緒に逃げ回る内に、こっちに跳んで来ました。

『だ、大丈夫ですか！？』

フレットさんが喋った！？

「ああ、なんとか・・・」

フレットさんと一緒にいた人は男の子でした。
見た感じ、私と同年くらいかな？ そう思っていたら、その人が
ゆっくりと顔を上げて・・・。

「・・・・・・・・へ？」

「ふえ？」

あれ？ この人の顔、どこかで見たことあるような・・・。

「・・・・・・・・高町なのは？」

私の名前を知ってる？ていうか、そうだ。この人の名前ってたしか
・・・。

「蓮丈・・・・・・・・直哉くん・・・・・・・・だっけ？」

S i d e 直哉

あつれー？　なんで高町がここにいるんだー？
ていうか、意外なことに、名前知られてたよ。

なぜかちよつと感動。

「えと・・・蓮丈くんは、どうしてここに？」

なんて考えてたら、同じ疑問を高町に聞かれた。

「ああ、このネズミの声が聞こえてきてさ。んで、その声の主を探してたら、ここについた」

「・・・ネズミ？」

ん？なんだろう、訝しむような視線が・・・。

「ああ、こいつ」

言いつつ、ネズミの首根っこを摘まみ上げる。

「・・・あゝ・・・えつと・・・」

・・・あれ？　なんで苦笑い？

「えつとね？　蓮丈くん」

「？」

なんだ？

「その子・・・ネズミじゃなくて、フェレットっていうんだけど・・・」

「・・・え」

なん・・・だ・・・？

「・・・知らなかったんだね」

「・・・うん」

・・・ヤバイ。

超恥ずい。

高町の優しい視線が尚更辛い。

『・・・あのー・・・』

「？」

『お取り込み中にとじる悪いんですけど・・・奴、来てますよっ』

「？」

「ひゃっ」とかって声が聞こえたけど、無視。

「で、方法は？」

『・・・君と彼女には、素質がある』

「・・・素質？」

手頃な大きさの樹に身を隠し、フェレットの言葉に耳を傾ける。

『そう。だから、お願いします。僕に力を貸してくれませんか？』

「・・・」

高町も、神妙な面持ちでフェレットを見つめる。

『僕は、ある探し物のために、この世界とは違う、別の世界からやってきました。』

探し物・・・ねえ。

『けれど、僕一人の力だけじゃ、それは叶わないかもしれない・・・』

「・・・だから、素質を持つ人に、力を貸してもらおうって？」

『・・・』

沈黙は肯定なり・・・当たりか。

『お礼はします、必ずします！ 何であっても、必ず！』

「フェレットさん……」

「……はあ」

高町はきっと、協力するだろうな。だったら……。

「わかった。で、何をすればいい？」

「え？」

『い、いいんですか！？』

予想外だったのか？ 僕の答えに。

「もう乗りかかった船だ。やれるだけのことはやってやるよ」

そうして、高町の方を向く。

「高町もいいよな？」

「うん……うん！」

決まりだな。

「それで？」

「私たちは何をすればいいの！？」

『僕の持っている力を、君達に使ってほしいんだ・・・けど』

「？ 何かあるのか？」

『僕が持っている力は、一人分しか無いんだ。だから、どちらか一人にしか・・・』

・・・そういうことは、もっと早く言おうぜ。

「ええっ！？ じ、じゃあ、どうすればいいの!？」

はあ・・・ま、妥当だな。

「高町。お前が貰え」

「え・・・?」

『じゃあ、君は・・・!』

「実を言うと、魔法にはある程度理解があるんだ。けど、だからって戦えるかどうかは怪しいもんだ。だから、確実性の高い、高町がやった方が良く」

「だけど・・・」

『彼女一人じゃ、危険すぎます!』

「じゃあ、どうしろってんだよ！ 他の力は無いんだろ!？」

このままじゃ、いつまでも平行線だ！ しょうがねえ、こうなった

ら無理矢理・・・！

『マスター』

「『』・・・え？」「」

なんだ、今の声・・・どこから・・・？

『ここです。我がマスター、直哉』

ここって・・・僕の首元の？ って！

「まさか!？」

ある結論に行き着いた僕は、服の中から母さんの形見の宝石を引っ張り出す。

見ると、宝石が僅かに明滅するように発光している。

『これは・・・デバイス!? どうして・・・』

「わからない・・・母さんの形見の宝石が、なんで・・・」

『マスター。詳しい説明は後で行います。今は、あの異形を止めることに専念しましょう』

「あ、ああ」

『そちらのお二人も構いませんね?』

「『は、はい!』」

おお、すげえな、こいつ・・・。

『それじゃあ、君にはこれを』

そう言うと、フェレットは首に提げていた赤い、丸い宝石を高町に渡す。

「暖かい・・・」

『それを手にして、眼を閉じて。集中して、僕の言葉を復唱して』

『うん』

S i d eなのは

フレットさんに渡された宝石を胸に抱える。すると、不思議な何かが流れてきた。

『いい？　いくよ！？』

「うん！！」

『我、使命を受けし者なり』

「我、使命を受けし者なり」

『契約の下、その力を解き放て』

「えと、契約の下、その力を解き放て」

凄い……呪文の度に、暖かい力が、さっきより強く、流れこんでくる……。

『風は空に、星は天に』

「風は空に、星は天に」

流れこむ……うっん、違つ。きつと、目覚めているんだ……。

『そして、不屈の心は』

「そして、不屈の心は」

『「この胸に!!」』

私とフレットさんの声が重なった瞬間、宝石が一際大きく輝いた。

『「この手に魔法を！ レイジングハート、セーット、アープ
……」』

『Stand by ready・set up』

S i d e 直哉

おお・・・なんか、すげえな・・・。

『マスター、我々も』

「え？ あ、ああ。えっと、僕もお前に続けばいいのか？」

『いえ、マスターの頭に浮かんだ言葉を唱えていただければ、それで十分です』

「頭に浮かぶって・・・ツ!!」

な、なんだ・・・頭の中に、何かが・・・!

『さあ、マスター!!』

「くっ・・・わかったよ!!」

我、宿命を背負いし者なり

血盟の下、その力を解き放て

闇は胸に、光は天空そらに

そして、憎悪の心はこの胸に!!

「この手に力を・・・!」

最後の呪文を唱え終わる。それと同時に、胸の奥に、何か熱い力が流れこんできた。

ああ、わかる。よく覚えてる。

この感覚は、あの時と同じだ。

父さんと母さんが死んだ時に感じた、あの感覚だ。

「イーヴィルハート！ セーット、アープ！」

『Stand by ready・set up』

今ここに、不屈のエースと憎悪の戦士が誕生した。

第二話「不屈の心、憎悪の心」（後書き）

はい、いかがだったでしょうか？

今回は、直哉の日常の一部とセットアップまでを書いてみました。ちょっと無理矢理な気が、しなくてもないですが……。

ていうか、なのはの呪文って、あれでよかったかなあ……。なにせ、無印の知識、セリフの全てまでは把握してないもので……。

ちなみに、気付いた人もいると思いますが、直哉の口調が、日常パートと真面目パートで微妙（？）に違います。

が、これは仕様です。はい。ミスとかじゃないですよ？ ええ。

長々と後書き書いてしまいました……。

何か気になった点や、ご意見やご感想があれば、是非お願いします。

それでは。

第三話「初戦闘と新たな影」(前書き)

第一話で若干のミスを見つけたので、修正しました。

第三話、投稿っす！

はい、意味無くテンション上げてみました。

最初の反省から脈絡が何も無い。

馬鹿野郎ですね、はい。

それはそれとして(オイ

今回は直哉となのはの初の共同作業(笑)です。

どうぞお楽しみください。

第三話「初戦闘と新たな影」

Side直哉

『音声認証による、リミッターの一部解除を確認。マスター権限を旧マスター、「リーシャ・シリス」より、新マスター、「蓮丈 直哉」へ完全に譲渡。それに伴い、戦意高揚抑制のプログラムを発動、これより戦闘形態へと移行します』

頭に直接、イーヴィルハートの声が響く。それと並行して、胸の奥に溜まっていた力が全身に染み渡っていくのを感じた。

知識に乏しく、経験は無くても、感覚でわかる。

これが、イーヴィルハートの・・・

「魔法の・・・力・・・」

父さんと母さんを殺した力。

今まで、忌み嫌いなながらも、心のどこかで欲していた力。

それが今・・・。

「僕の・・・手に・・・！」

『戦闘時における基本形態、スタッフフォームを展開。同時に、バリアジャケットも展開します』

途端、僕の全身を光が包む。それが晴れると、僕の身体は黒いシャツにズボン、両腕にはガントレットが着いており、両の足には脛当てがあった。

腰からは、スカーフのような物が伸びて、胸には胸当てが装着されている。

まるで、魔法使いというより、「戦士」という単語の方がしっくり来る姿になっていた。

ふと右手を見ると、そこには、柄が黒く、先端部分には×の形に組まれた銀色の棒。その中央には、さっきまで宝石だった、イーヴィルハートのコアがはまっている杖が握られていた。

「すごい・・・なんか、力が止めどなく溢れてくる・・・」

力を身体に馴染ませるように、少しストレッチの要領で身体を動かす。

あちこちに鎧のような装甲が施されているから、動きにくいと思っただけ、そういうわけでも無いみたいだ、恐ろしいくらい馴染む。

「ていうか、今さっき言ってた、旧マスターの名前・・・」

『そうです、マスター。かつて私は貴方の母君、リーシャ・シリスの力・・・デバイスとして稼働していました』

母さんのデバイス・・・てことは

「母さんも魔法使いだったってことか」

『「魔法使い」という言い方には、少々語弊があります。我々のよ

うなデバイス・・・魔法を行使するための武器を用いる者は、我々の世界では、「魔導士」と呼ばれています』

「魔法使いじゃなくて、魔導士・・・か」

『はい』

じゃあ、父さんや母さんを殺した連中も、魔導士ってことか・・・。

これで僕も、奴らと同類、か。

「まあ、いいか」

そう。別に構わない。力が手に入ったのだから。

『マスター』

「ん？」

『彼女の方も、準備が整ったようです』

イーヴィルハートの言葉に耳を傾け、高町の方を見ると、そこにはイーヴィルハートとは、真逆の色合いの　　白い柄に、先端部には金色の台座、その中央に紅い宝石がついた　　杖を手に持ち、これまた僕とは真逆の色合いの服（バリアジャケットだっけ？）に身を包んだ高町が立ってこっちを見つめていた。

・・・どうでもいいけど、あの服、学校の制服にちょっと似てるな・・・。

『本当にどうでもいいですね』

「心読まれた!?!」

恐れ! なんだコイツ?!

『あなたのデバイスですが?』

「だから心を読むなって!」

ああ、もう! 自分のマスターのプライバシー無視か!?

「あの……」

そうしていると、高町が不安そうに話しかけてきた。

「ん? ああ、ごめん、つい」

「う、ううん。別にいいんだけど……あ、紹介するね。このフェレットさん、ユーノくんって言うんだって」

『ユーノ・スクライアです。スクライアは、僕の出身の部族の名ですけれど』

「それで、この子が、レイジングハートっていうの」

『よろしくお願ひします』

フェレットがユーノ、デバイスがレイジングハートか。こっちも自己紹介はしないとな。

「『丁寧にもどうぞ。僕は蓮丈 直哉。こいつの名前は、イーヴィルハート』」

『以後、お見知りおきを』

『・・・それにしても・・・』

「?」

フェレットもとい、ユーノが僕と高町を交互に見ながら言う。

『二人とも、すごい魔力の量だ。こんなに大きな魔力を持った人、見たこと無いよ』

声色からして本気で驚いているのだろう、ユーノがそう告げる。だが、僕の意識は既に、あの化物に向いていた。

「驚くのは別にいいけど・・・」

「うん、そうだね・・・」

僕の言葉に高町が続く。見ると、化物は僕達を完全に捕捉していた。

「来るぞ（よ！！）」

G a a a a a a a a a a a a ! ! ! ! !

僕と高町の声が重なり、同時に化物が襲いかかってくる。その瞬間、

イーヴィルハートとレイジングハートが同時に声を発した。

『Fatal guard』

『Protection』

二人（？）の声が響いたと思ったら、僕の前には紅色が混じった黒色の、高町の前には桃色の壁が展開され、化物の攻撃を弾いていた。

「これが・・・」

「魔法、か・・・」

『魔法の発動に必要なのは、術者の精神エネルギー、それを触媒に、魔法を発動します』

『簡単な攻撃や防御なら、願うだけで発動できます』

『しかし、更に大きな魔法の発動には、呪文が必要になるのです』

ユーノの簡単な説明にレイジングハートとイーヴィルハートが続く。

「なるほどね・・・んで？ 聞きそびれたけど、あの化物はなんなんだ？」

『あれは忌まわしき力によって作られた存在。あれを元に戻すには、その杖を使って封印しなきゃいけないんだ』

「封印って……どうすればいいの?」

『マスター。貴女の中に、それに必要な呪文があるはずです』

「私の中に……?」

思案中の高町達を横目に見ながら、こつちも会議を始める。

「なあ、イヴィ。封印つつても、まずは動きを止めなきゃ話にならないよな?」

『ええ、その通「……イヴィ?」』

「ん? ああ、イーヴィルハートじゃ、長くて面倒だからさ。そう呼ばせてもらっけど、いいか?」

『……イヴィ……です、か……イヴィ……イヴィ……』

「?」

僕が名付けた愛称を反芻するイヴィ。

「どうした? もしかして気に入らなかったか?」

『……いえ。そんなことはありません。素敵な名をありがとうございます、マスター』

……どうやら気に入ってくれたようだ。

「よし! じゃあ、改めてイヴィ。アレの動きを止めるには、どう

すればいい?」

『はい。普通なら、拘束系の魔法を用いるのですが、今のマスターでは制御が難しいと思います』

だろうね。なにせ、今さっき魔導士になったばかりなんだし。

『ですので、今から初期の攻撃魔法で、あの異形の動きを封じます』

「わかった!」

『では、マスター。私を構え、集中を!』

その言葉に、僕はイヴィを水平に構え、意識をイヴィに傾ける。

『唱えてください、マスター! 敵を砕く弾丸の名を!』

力が身体を駆け巡る。

そして同時に、魔法の名が頭の中に浮かぶ。

「ブレイクシューター!」

『Break shooter』

途端、僕の周りに先程の壁と同じ色をした、光の弾丸が四発現れる。その弾丸を、明確な敵意を持つ化物に向け、固定する。

「シュートオ!!!」

『shoot』

そして解放された魔力の弾丸は、四発とも吸い込まれるかのように化物に直撃した。

Gyyyyyyyyyy!!??

予想外の攻撃だったのか、化物にかなりのダメージが通っていた。

「よし! 高町、頼むぞ!」

「う、うん!」

僕が一步下がると同時に、レイジングハートを構えた高町が踊り出る。

「リリカルマジカル!」

『封印するは、忌まわしき器、ジュエルシード!』

「ジュエルシード、シリアル????! 封印!」

『sealing』

ユーノと高町、レイジングハートが封印の呪文を唱えて魔法を発動すると、化物は姿を消し、そこには蒼いひし形の宝石が転がってい

た。

「これは……?」

『それが僕の探し物………忌まわしき器、ジュエルシード』

「忌まわしき器、ねえ……」

こんな小さい宝石が? と言いたいところだが、今までの現象を見る限り、かなりの危険物なんだろうな、コレ。

「それで、ユーノくん。これはどうすればいいの? 放っておくと危ないんだよね?」

『あ、うん。レイジングハートでそれに触れて。そうすれば大丈夫だから』

「わかった」

そう言うと、高町はレイジングハートでジュエルシードに触れる。すると、ジュエルシードはレイジングハートに吸い込まれていった。

『……これで、封印完了』

「……ふええ〜」

ユーノの言葉を聞いて気が抜けたのか、高町はその場へたりこんだ。

それと並行して、レイジングハートとイヴィは元の宝石に戻る。

「・・・なんかどつと疲れたな」

「うん・・・大変だったね・・・」

『・・・すみません・・・こんなことに巻き込んで・・・』

「ううん、ユーノくんが気にする事じゃないよ」

「そうだよ。僕達が勝手に関わったんだ。謝ることなんて無い」

『二人共・・・ありがとう・・・』

和やかな雰囲気の流れる。だが、そういう時間ほど、結構簡単にぶち壊されるわけで・・・。

ウー・・・ウー・・・

「・・・サイレン？ パトカーの？」

『・・・こつちに向かってる？』

「・・・まあ、あんだけ派手に暴れればなあ」

瞬間、二人と一匹でアイコンタクト。僕らが下した結論は一つだ。

「『逃げよう!』!」

言いが速いか、すぐさま僕は高町の手とユーノの尻尾をひっ掴み、その場から自己ベストかと思うくらいの速度で退散した。

Sideなのは

「はぁ・・・はぁ・・・ここまで来れば、大丈夫、だろ・・・はぁ・・・」

直哉くんを手を引かれ、私はさっきまでいた森の中から、家の近くの住宅地まで走って逃げてきました。

直哉くん、足速いんだなあ……。

「さて。かなり時間がかかったし、早く家に帰らないと……」

「うん、そうだね」

言いながら、直哉くんと手を離す。

「そういえば、ユーノはこれからどうするんだ？」

「あ、それなら大丈夫。私の家で預かることになってるから」

『え？ そうなんですか？』

「うん。ごめんね？勝手に決めちゃって」

お父さんやお母さんにもちゃんと私がお世話するって、お話してるし、大丈夫……だと思う。

「そっか。なら安心だね」

そう笑って、直哉くんは私の家とは逆の方向に歩いていく。

「じゃ、ユーノの事、よろしくな、高町」

あ、やっぱり名字呼びのままなんだ。

「待って、直哉くん」

「!？」

私が呼び止めると、直哉くんはびっくりした様子で振り返った。

「な、直哉、くん？」

「あ、うん。せっかく仲良くなれたんだから、名前で呼びたいし、呼んでほしいんだけど・・・ダメかな？」

「仲良くって・・・ほんの何分か、一緒に不思議な体験しただけ・・・」

「ふえ？ でも私は、直哉くんと仲良くなれたかな？ って思ってるけど・・・」

そう言うと、直哉くんは可哀想なものを見る目で私を見ってきました。
すっごく失礼なの。

「はぁ・・・わかった」

「え？」

「名前で呼んでほしいんだろ？ いいよ、それで」

「う、うん」

「・・・じゃ。また明日、学校でな・・・」なのは「」

「……うん！　じゃあね、直哉くん！」

また明日！　と言って、私はユーノくんを抱えて、走って家に帰っていきます。

ふふっ　明日はアリサちゃんとすずかちゃんに、直哉くんのこと紹介しなくちゃ。

そんなことを考える内、家に着いた私は、ゆっくりと玄関の扉を開く。

「誰もいませんように……」

そう祈りながら、扉を開ききった私。

「………お帰り」

「………ただいま」

そんな私を出迎えたのは、鬼の形相を浮かべた私のお兄ちゃん、高町　恭也でした。

S i d e 直哉

それにしてもビックリしたな。いきなり高町・・・じゃない。
なのはが「名前呼びがしたい」なんて言いたすとは。しかも、「ま
た明日」とか言っちゃったもんだから、明日絶対挨拶してくる。し
かも名前呼びというオプション付きで。

「はあ・・・」

まあ、明日のことは、後で考えればいい。とりあえず今は・・・

「説教の途中で溜息とは、いい度胸だな少年？」

正座している僕を、かなりキレ気味の表情で見下ろす僕とライナの保護者、

「ニール・シリウス」さんの説教をどう掻い潜るかの術を模索しよう。

Side ?

海鳴市から少し離れた市内。そのビルの屋上に、一人の少女と一匹の狼が佇んでいた。

街から吹く風によって揺れる、自分の長い金色の髪を鬱陶しそうに払いながら少女は言葉を紡ぐ。

「・・・ここに、母さんの探し物が・・・?」

『ああ、間違い無いよ。ついさっき、発動を確認したからね』

少女の言葉に、その傍らに佇む狼が続く。

「そっか」

言いながら、少女は優しく狼の頭を撫でる。

「それじゃあ、早く見つけよう。蒼い宝石……一般名、ロストロギア、ジュエルシード」

その言葉と共に、少女と狼は暗い夜の闇の中へと消えていった。

第三話「初戦闘と新たな影」（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回は初戦闘とその後を書いてみました。

こんな感じで良いのかなあ・・・。

ちなみに、この作品におけるデバイスの言語は

セツトアップ時や技名、簡単な受け答え

英語

会話

日本語

ていう感じで進めていきたいと思えます。

誤字や脱字の他、ご意見やご感想などがあれば、ぜひお願いします。

それでは。

第四話「友達追加」(前書き)

第四話投稿しました。

・・・特筆すべきことが無いです。

それでは、どうぞ。

第四話「友達追加」

S i d e 直哉

「……………眠っ」

魔導士になった翌日の朝。いつも以上の眠気に襲われながら、蛭や社と一緒に学校へと向かう。

「直哉が朝眠そうなのはいつものことだけど……………」

「今日は輪をかけて眠そうだな」

「はは……………昨日の夜、ちょっとね」

あその後、一時間に渡って説教を食らった後、時間的な問題で解放された。

だが、解放直後に今度はライナからお説教だった。

いきなり家からとび出した僕のことを、かなり心配してくれていたらしい。素直に謝ってお礼を言ったら、しばらく僕が朝食の準備をすれば許す、と言われたので、渋々その条件を飲んだ。

え？ 断ろうとはしなかったのかって？

無駄だよ。基本的にライナは、自分が決めたことは曲げないんだ。何があるうともね。

「そんなわけで、僕は今、猛烈に眠いのである」

「「は？」」

そう言っただけで締め括ったなら、隣の二人から「いきなり何言ってるの、こいつ？」「みたいな視線が飛んできた。うん。きつと早朝と寝起きによるテンションのおかしさのせいだろう。僕は何も悪くない。

「まあ、直哉がおかしいのもいつものことだしな」

「そだね」

「ちよつと待てコラ」

僕がおかしいって？ おいおい、蛍よ。それはひどい勘違いってもんだよ。百歩譲って僕がおかしかったとしても、人生ゲームやっている時のお前よりかはマシだから。

「直哉。今、失礼なこと考えなかったか？」

「まつさかあ」

「.....(。.#)」

あ、その顔いいw

「てめえ、放課後覚えてるよ.....」

「はいはい」

放課後か・・・そういえば今夜、ニールさんが、なんか話があるって言ってたな。
やだなあ・・・。

O H A N A S I I じゃなきやいいけど・・・。」

「直哉。今の時点でそのワードはアウトだと思っよ」

「社がついに読心術を?!」

「いや、途中から声に出ってたから」

あ、そうなんだ。

その後、色々と雑談とかしながら学校に向かっていく。今夜の事とか、魔法の練習どうしようとか、ジュエルシードの事とか、色々考えながら。

だから、失念していたんだ。

昨日の一言のせいで起る、この後の騒動のことを・・・。

「あ。おはよう、直哉くん」

「・・・・・・・・」

教室の戸を開けて中に入る。途端に僕に向けてかけられる、ほんわかボイス。

それと同時に、僕の後ろから二つの驚愕に満ちた視線、正面にいる二人の少女　アリサ・バニングスと月村すずかから、キツめの視線と優しげな視線が向けられる。

だが、僕を閉口させるのは、そんな視線なんかじゃない。

それは殺気。

クラス中の男子から現在進行形で放たれる圧倒的なまでの殺気だった。

(き、気まずい……)

しかし、そんな僕的心情に気付くこと無く、この事態を引き起こした張本人……高町なのはは、こちらに向かって歩いてくる。

「直哉くん、どうしたの？」

こちらをやや上目遣いで見上げながら、高m……じゃない。なのはが尋ねてくる。

それに僕は、なるべく努めて平静を装いながら、挨拶を返す。

「いや、なんでもない。おはよう、なのは」

言った瞬間、180°方向転換を余儀無くされた僕は蛍に胸倉を掴まれ、激しく揺さぶられた。

「なんで?! え、なんで?! お前と高町、昨日まで何も無かったじゃん! 挨拶なんて一回もしたこと無かったじゃん! え、何!?! 昨日の今日でお前ら二人に何があったの!?!」

言いながらも、蛍は僕を揺さぶることをやめはしない。少し苦しくなってきたところで、社に助けを求めるのだが……。

「ついに異性に興味を持ったんだね?! やったね、直哉!」

などと、意味不明なことを口走っていた。

社。その言葉には、どんな意味があるんだ? 昼休みあたり、ゆっ

くり聞かせてもらおうか？

驚きのあまり、無意識に僕を殺しにかかる蚩と、鼻息を荒くして「そっちじゃないんだよね！」とか言い続ける社。

それを小首を傾げて眺めるのはと、呆れ顔のバニングス、苦笑いを浮かべている月村。

そして、未だ僕に殺気を浮かべ向け続ける一部の男子と、机に突っ伏している男子陣。

（カオスだ・・・）

素直にそう思った。

ちなみに、この騒動は担任の先生が来るまで続けられた。

でもって、昼休み。

いつものように、蛭や社と教室の隅で弁当を広げるはずだったのだが……。

「どろろしてこうなった？」

場所は屋上。

僕の目の前に座るメンバーは、高町なのは、アリサ・バニングスに月村すずかの三人。

蛭と社はいない。理由は単純。

昼休みに入った途端、僕だけがなのはに拉致……もとい、昼食を共にするよう誘われたからだ。

なのはに手を引かれ、月村に背中を押されながら教室から連れ出さ

れる僕を見ていたあの二人の脳内には、きつとドナドナが流れていたと思う。

「・・・なあ、なのは」

「ん？ なに、直哉くん」

「なんで僕はちゃんと知り合ってから、二十四時間も経ってない同級生とその友達二人と、長年の友人達をさし置いて、一緒に弁当を広げてるんだ？」

「んつとね・・・良い機会だから、アリサちゃんやすずかちゃんに紹介しとこうと思って。直哉くんのお友達の・・・誰だっけ？」

「進藤さんと日向くんだよ、なのはちゃん」

「あ、そうだった」

僕と違って名前覚えられてないよ、あの二人・・・何気に酷いぞ、高町なのは。

「それでね、直哉くんのお友達だし、せっかくだから誘おうかな？
とも思っただけど・・・」

「大勢でゾロゾロっていうのもどうかと思って、あたしが止めたのよ」

なのはの言葉にバニングスが続く。

「この子、男嫌い・・・？ いや、単純にガサツなだけか・・・？」

「あんた今、失礼なこと考えなかった？」

「・・・ソ、ソシナコトナイヨー」

「なによ、その喋り方・・・まあ、いいわ」

「それじゃ、改めて自己紹介しよつ。私、高町なのは」

「アリサ・バニングスよ。なのはを名前呼びしてるんだから、あたしの事もアリサでいいわ」

「月村すずかです。私のことも、すずかでいいから。これからよろしくお願いします」

三者三様に自己紹介してきた三人に、僕も返す。

「僕の名前は蓮丈 直哉。せっかく名前呼びでいいって言ってくれたから、僕の事は直哉でいい。これから、改めてよろしく」

言つて、軽く頭を下げる。

「わかつたわ。それじゃあ、直哉。単刀直入に聞くけど・・・なのはと、いつの間に仲良くなったわけ？」

名前を知るや否や、早速クラスの男子全員（僕除く）が思っているであろう疑問をアリサが聞いてきた。

「ああ、それな。昨日の夜、気晴らしに散歩に出かけてたんだ。そ

したら、なんか逃げてる風なフレットがいてさ。そいつ繋がりで、仲良く・・・みたいな感じ?」

真相は伏せておく。なのはが驚いているが、目線で黙らせる。言ったところでそう簡単には信じてはくれないだろうし、僕自信、知り合ったばかりなのに話すほど、この二人を信用したわけじゃない。

「ふうん、そうなの」

「じゃあ、ユーノくんのおかげなんだね」

あ、なんだ。もうユーノのこと知ってるのか。

「まあ、そんな感じで色々あってさ。今ここに至るってわけ」

言いながら、弁当に入っている卵焼きを口に運ぶ。

・・・うん。やっぱりライナが作った方がうまいや。

昼食を終えて教室に戻った時、蛍からは妬み、社からは生温かい、その他の男子からは殺気のコモった視線を受けたことを、報告して

おく。

「いつしよに帰ろ、直哉くん」

「・・・・・・・・」

放課後。帰り支度を整え、蛭と社に声をかけようとした矢先に例の彼女から素敵なお誘い。

向こうからしてみれば善意でやってるんだろうけど・・・・・・・・うん。真横にいる二人の親友からの視線が、男子連中の殺気よりもツライ。こんな時の解決策は一つだけだろう。

「あー・・・・・・・・うん、いいよ。じゃあ、こっちの二人・・・・・・・・蛭と社も一緒にいいか？」

「もちろん」

なのはがそう言った途端、男子連中からの殺気が蛭と社にも向けられる。だが、そんな視線に気付かず、蛭は満面の笑みで僕に詰め寄ってきた。

「ありがとう、直哉！俺達を除け者にするつもりは無いんだな！

「？」

「そうだけど、蛍。あんまり寄るな。キモい」

「持つべきものは、やっぱり親友だ！俺達はずっと親友でいような、なお＼へぶっ！？」

キモさが限界を超えたので、顎に小気味の良いフックを打ちこんでおいた。

床を転げ回る蛍を見下しつつ、社にも視線を向ける。

「直哉・・・やっぱり、女より、男の方が・・・」

即座に目を逸らす。なんだか、あの続きは聞いちゃいけない気がした。

「ほら、あんた達。一緒に帰るんだったら、遊んでんじゃないわよ」

「アリサちゃん、そんな言い方・・・」

呆れ顔のアリサと苦笑いのすすかが先に教室を出ていき、それに続いてなのはが出る。

遅れるのもあれなので、未だに床を転げ回っている蛍に蹴りを一発叩き込んでから引き起こし、社の手を引っ掴んで教室を出た。

「・・・と、いうわけで。俺は進藤 蛭。よろしく」

「俺の名前は日向 社だよ。よろしくね、三人とも」

「高町なのはです」

「アリサ・バニングスよ」

「月村すずかです、よろしくお願いします」

バス停への帰り道、蛭と社が三人と自己紹介しあっている。社はともかく、蛭の方は、ずっと話してみたいって言ってたからな。結構、感激しているだろう。

まあ、この分なら数日中には仲良くなれると思う。蛭とアリサ、社とすずかかって、お互いに雰囲気とか似てるし。

そんな空気の中、唐突に昨日も感じた妙な感覚を感じた。

（これって・・・）

ふと、なのはの方を見る。

彼女も感じたようで、意志疎通もかねて頷きあう。

「・・・悪い。僕ちよつと、用事があったんだ」

「「「「え？」「」「」

なのは以外の面々が僕に視線を向ける。

「そういうわけだから、僕はこの辺で！」

混乱するみんなをよそに、カバンを抱え直し、その場から走り去る。

「イヴィ、場所は？」

『この近くの神社かと思われます』

「了解だ。走るぞ！」

「到着！」

ジュエルシードの反応を感じた神社に入る。

そこには……。

「……………まじか」

凶悪な外見と強靱な四肢、鋭利な爪と牙を持つ犬っぽい何かだった。

「でもまあ、ビビッてる暇は無えから……やるか！」

『オーライ、マスター！』

「イーヴィルハート！ セットアップ！！」

『Stand by ready・set up』

バリアジャケットを身に纏い、杖……イーヴィルハートを握る。

二回目の戦闘、速攻で終わらせてやる！！

第四話「友達追加」(後書き)

いかがだったでしょうか？

一気に戦闘終了まで行きたいところでしたが、キリが良いので「」までにします。

今回は、日常編を書いてみました。こうでもしないと直哉とアリサやすすかの出会いがやれなかったので……。

そして、二回目の戦闘。

次はきっと短いだろうなあ……。

あ、キャラ紹介の方は、市街地戦の後あたりにしたいと思ってます。

では、また次回。

第五話「始動」(前書き)

第五話投稿です。

相も変わらず駄文ですが、楽しんでいただければ幸いです。

では、ごじゆ。

第五話「始動」

セットアップを済ませた僕に浮かび上がる、一つの疑問。

「・・・なあ、イヴィ」

『なんでしよう?』

「今回は随分、すんなりとセットアップが済んだけど、呪文って前回のあれだけでよかったのか?」

そう。今回はあまりに自然にセットアップした為に気付くのが遅れたが、呪文を省略して、戦闘に何か支障は無いのか?

『問題ありません。昨夜の詠唱と魔法の使用により、私はマスターの身体に馴染んでいます。それにより、あらゆる過程におけるラグの簡略化を行うために、すでに全システムの最適化は完了していますので』

「そっか」

小難しい話はよくわからないけど、多分、昨夜の一件でイヴィは真正銘、僕だけのデバイスになったんだろう。

「じゃあ、イヴィ。結界を頼む」

『All light』

言っと、イヴィのコアが光り、神社の辺り一帯を外界から切り離すかのように結界が広がった。

「これで遠慮はいらねえ・・・行くぞ、イヴィ！ ブレイクシューター！」

『Break shooter』

昨夜と同様、僕の周囲に四発の魔力弾が作られる。

「シューーートツ！！」

そして、魔力弾を一気に化物に向けて放つ。

だが・・・

グルアッ！

「なに?!」

化物は素早い動きでブレイクシューター避け、そのままこちらに爪を構えて突っ込んできた。

「くっ・・・!?!」

『Fatal guard』

間一髪、イヴィが防壁を張り、化物を弾き返す。

『油断大敵です、マスター』

「ああ、悪い。助かったよイヴィ」

言いつつ、杖を構え直す。

「けど、どうする？ ああも速いと、ブレイクシューターだけじゃちょっとキツイぞ？」

『・・・・・・・・』

僕の言葉に、イヴィはしばし、考えこむように黙る。

「直哉くん！！」

『直哉！！』

するとそこに、なのはとユーノがやってきた。

「ナイスタイミングだ、二人共！」

『お待ちしていました』

だが、なのはとユーノを認識した化物は、すぐさま二人に襲いかかる。

『マスター！ 二人を！』

「わかってる！ ブレイクシューター・・・シュート!!」
すぐさまブレイクシューターを放つ。当然のように避けられたが、
それでいい。あくまで時間稼ぎのための攻撃だ。

『くっ・・・なのは！ レイジングハートの起動を！ 急いで!!』

「ふえっ?! 起動って・・・」

『昨日やった、 我、使命をくってやつだよ!』

「あ、あんなに長いので、覚えてないよお・・・」

『じゃあ、昨日みたいに僕に続いて!』

「う、うん!!」

予感はしてたけど、やっぱりアレを繰り返すのかよ!

ツッコミを入れつつも、意識は化物から離さない。だが、ブレイク
シューターの軌道が読まれ始めたのか、魔力弾を掻い潜り、化物は
なのはに肉薄する。

「しまっ・・・なのは!!」

「!?!」

なのはに化物が突っ込んでいく。だが、次の瞬間・・・。

『Stand by ready・set up』

レイジングハートが光り輝き、なのはの手に白い杖が握られる。

「レイジングハート・・・」

だが、ここで気が付く。

「なのは！ お前、バリアジャケット！！」

「え？ あっ！」

なのはが気付くが、時すでに遅し。化物の爪がなのはに迫る。

『Barrier jacket』

途端、バリアジャケットが展開され、同時にプロテクションも張られる。化物はそれにぶつかり、弾き飛ばされた。

「隙が出来た・・・今なら！」

『お待ちください、マスター』

そうして、ブレイクシューターを展開させようとした僕をイヴィが止める。

「イヴィ？　なんで・・・」

『たった今、私にかけられていたプロテクトの一部を解除しました。これにより、新たな形態での戦闘が可能です』

「新しい形態？」

『はい。まあ説明するより、実際に見た方が効率的です。では、マスター。』

スラッシュフォーム とコールを！』

「わ、わかった！」

言って、イヴィを空に掲げ、叫ぶ。

「イーヴィルハート！
スラッシュフォーム！！」

『All light・Slash form, set up』

僕の叫びにイヴィが応える。すると、杖の先端部にある、×型に組み込まれた銀色の装飾が杖の左右に平行に展開。そこから、紅色混じりの黒い魔力の刃が出現した。

「これが・・・」

set up

レイジングハートがなのはの言葉に応え、封印の準備が完了する。

「リリカルマジカル！ ジュエルシード、シリアル??、封印！」

『sealing』

なのはが呪文を唱える。すると、レイジングハートから桃色の光の帯のようなものが伸び、昨夜と同様、化物を包みこむ。

それが終わると、後には輝きを失ったジュエルシードと、さっきまで化物だったのであろう子犬が地面に転がっていた。

「封印完了、だね」

そう言って、なのははジュエルシードをレイジングハートに取り込ませる。

「イヴィ、結界はもういいよ」

『そのようですね』

イヴィに言い、辺りに張っていた結界を消してもらった。

『なのは。直哉も、お疲れさま』

「ユーノか。ああ、お疲れ」

「お疲れさまなの」

ユーノを肩に乗せたなのはと合流。神社の階段を降りつつ談笑する。

『そういえば、直哉。なんで封印をなのはに任せたのさ？ イーヴ
イルハートじゃ封印は出来ないの？』

そんな中、ユーノが質問してきた。

「あ、それは私も思ったの。どうして？」

「……て事らしいんだけど、どうなんだイーヴィ？」

僕にわかるわけでもないの、イーヴィに直接聞いてみる。

『そうですね……私にも封印魔法はありますが、私の本分はあく
まで戦闘ですので、効果は薄いと思います。なので、なのはさんと
レイジングハートに任せた方が確実性は高いかと』

「……だつてさ」

「??? えつと……?」

イーヴィの説明がわからなかったのか、なのはが首を傾げる。

・・・可愛いなチクシヨウ。

『つまり、イーヴィルハートは、封印が得意じゃないから、そういう事はなのはとレイジングハートに任せてるって事だよ、なのは』

「あ、なるほどー」

ポン、と手を叩きながら納得するなのは。

「・・・」

・・・こういふ奴には、この言葉を送っておこう。

(アホの子・・・)

その後は、適当に雑談しながら、なのはと別れて家に帰った。

「ただいまー」

「おかえり、直哉」

「お。おかえり」

玄関の扉を開けて家に入り、リビングに入ると、いつものように僕を出迎えるライナと、仕事が長期の休暇に入ったらしい、僕とライナの保護者、ニールさんがいた。

「さて、直哉。帰ったばかりで悪いんだが、お前にいくつか聞きたい事と、話しておかにならん事がある」

真剣な表情で僕に語りかけるニールさん。僕は、なんとなくこの展開を予想出来ていたので、慌てる事なく対応する。

「ええ。僕もニールさんに、ちょっとばかり聞いておきたい事と話しておかなきゃいけない事があったんです」

「そいつは好都合だ。んじゃ、メシの後にでも始めるとするか」
そう言っつて、ニールさんは席を立つ。

「あ、そうそう。お前にも必要な事だからな、ライナ」

「……ああ、わかつてる」

そうしてこの日を境に、僕、そしてライナは、決して逃げる事が敵
わない、魔法の世界に足を踏み入れる事になる・・・。

第五話「始動」(後書き)

japan17 (以下j) 「作者と」

直哉(以下直) 「登場キャラの」

j、直「後書き使ってダベリまshow」

直「って、ちょっと待て」

j「何かな？」

直「何かな？ じゃないよ。何」

j「ああ、これ？ 後書き使ってダベるコーナー」

直「いや、それはわかるよ。なんでいきなりこんなマネしてるの？
って話」

j「だって、いつもの後書きだけじゃ物足りないし……」

直「あんたの一存かい」

j「作者ですから」

直「はあ・・・まあ、いいや。で？　ダベるって言っても、具体的にはどんな事を話すんだ？」

j「まあ、簡単に言えば、その回の振り返りみたいなの。　ことを話そうかと」

直「なるほど」

j「じゃ、まずは簡単に振り返ってみると・・・二回目の戦闘だったね。君にとっても、なのはにとっても」

直「うん。ブレイクシューターの欠点が明らかになったな」

j「そして、イーヴィルハートのモード開放」

直「ああ。まさか、イヴィにプロテクトがかかってたとは知らなかったよ。誰がやったんだ？」

j「それは後のお楽しみ。さて、そして次回からは・・・」

直「僕とライナが魔法について詳しく説明を受けるんだな」

j「うん。詳しい内容は次回にまた」

直「ライナについても、何か明らかになるのか？」

j「それについても次回だ。まあ、楽しみにしときなさい」

直「わかった。じゃあ、期待しないで待ってる」

j「orz」

j「さて、今回投稿した、第五話「始動」。いかがでしたか？」

直「誤字脱字などの指摘される点や、ご意見やご感想があれば、ぜひお願いします」

j、直「これからも、どうぞよろしくお願いいたします」

第六話「講義と特訓、龍騎士の目覚め」(前書き)

第六話です。

今回からデバイスのセリフを、簡単な受け答えも英語表記にします。

今回は、説明なんかメインになると思います。

では、ごっご。

第六話「講義と特訓、龍騎士の目覚め」

Side直哉

夕食と入浴を終え、この蓮丈家のリビングには、三人と二匹・・・僕とライナ、ニールさんの三人と、アルビオンとヴリトラの二匹がいる。

微妙に重苦しい空気の中、ニールさんが口を開く。

「さて。こうして全員で集まるのは、俺らが一緒に暮らし始めた日以来なんだが・・・あん時と今じゃ、状況が違いすぎる。なあ、直哉？」

「・・・そうですね」

「ついわけで、ここらで俺の仕事内容や、今後、直哉にどうしてもらうかを話す。それと・・・」

「・・・俺にも色々と話してもらおうぞ、ニール」

「わかってるぞ」

ライナの言葉にニールさんが苦笑混じりに応じる。僕とライナ、アルビオンとヴリトラも、ニールさんが続けるのを待つ。

「さて、まずは・・・直哉」

「はい」

「お前のデバイスと話をさせてくれや」

その言葉に若干の驚きを覚えつつ、僕は首元からイヴィを取り出し、テーブルに置く。

「……久しぶり……で、いいのか？ イーヴィルハート」

『……ええ。お久しぶりです、シリウス』

「……これは？」

話の内容に着いていけてないライナが聞く。

「これは、デバイス。簡単に言えば、魔法を使うための端末みたいな物だ」

「デバイス……」

「っわけで。ほれ」

言って、ニールさんは懐から何かを取り出し、ライナに放る。

「わっ……と」

「それは？」

「お前のデバイスだ、ライナ」

「え!?!」

ライナの手に握られているのは、何かの翼を象った銀色のレリーフ。中心部分には、同じく銀色の球体がはまっている。

『お久しぶりです、我が主』

「なっ?! し、喋った!?!」

「おいおい、覚えてないのか?」

「な、何を・・・」

「それ。俺がお前を保護した時に、お前が持ってた奴だぞ?」

「え・・・」

ニールさんの言葉に、ライナが絶句する。

「んじゃ、前フリはここまでだ。・・・始めるぞ」

それまでとは違い、本格的に真面目な空気が流れる。

「まず、俺がやってる仕事について把握してもらおう。俺は、「時空管理局」「つーとこに勤めてる」

「時空……」

「管理局……」

時空管理局。その名前には聞き覚えがある。前に一度、ニールさんが話してくれた。

ニールさんの話によれば、この世には僕達が生きている「地球」という一つの世界の他に、幾つもの次元に存在する世界があり、その内の幾つかを自らの手で「管理」し、それを守護する機関があるらしい。

それが時空管理局という組織。

ニールさんは、そこで執務官という役職に就いているらしい。

「お前を保護したのも、仕事の一環だったんだよ、ライナ」

「そうだったのか……地球の他にも、幾つもの世界が……」

かつてライナは、記憶を失い、各地を放浪していた所をニールさんに保護された事を聞いた。ライナを保護した場所……その世界の名は、

「ミッドチルダ」と呼ばれる世界だそうだ。

ライナとしても、管理局の存在や、幾つか世界がある事は知っていたそうだが、詳しい部分までは知らなかったみたいだ。

そして、ここで僕に浮かび上がる、一つの疑問。

「・・・ニールさんも、魔導士だったんですね」

「ん・・・まあ、な。イーヴィルハートから聞いてなかったのか？」

「母さんがそうだったっていうのは聞いたけど・・・やっぱりそうだったんですね・・・」

「ああ・・・軽蔑したか？」「いや、そういう訳じゃ・・・ニールさんは、奴等とは違う・・・!」

「そうだ。ニールさんは違う。父さんや母さんを殺した魔導士とは違うんだ・・・!」

「・・・ニール」

と、ここで、今まで口を閉ざしていたライナが喋り出す。

「ん？ なんだ？」

「あんたや直哉が魔導士だという存在なのは理解した。だが、俺にこいつ・・・デバイスを渡す事は、どう関係してくるんだ？」

「それもそうだ・・・別に、ライナにデバイスを渡す必要なんて・・・」

「なんだ、そんな事か」

そんな事って……。

「理由は至極単純だ。

ライナ。お前には直哉の手伝いをしてほしい」

「………は？」

手伝い？ ライナが、僕の？

「……ま、待て。いきなり直哉を手伝えとか言われても、こいつが何をしているのか……」

「あ。それもそうか」

「………」

前々から思ってたけど、この人ってガサツすぎる気がする。

「んじゃ。説明頼むわ、直哉」

「え、僕!？」

「ったりめーだろ。第一俺あ、なんでお前が魔導士になったのかさえ知らねーんだから」

こ、この人は……!

「はぁ……わかりましたよ……」

それから時間を少し費やして、僕は魔導士になった経緯を話した。

ジュエルシードの事。それがきっかけて魔法の力に目覚めた事。ついでになのはとユーノの事も。全て、洗いざらい。

「ジュエルシード……こりゃまた、厄介な物に関わっちまったなあ、お前」

「……ジュエルシードを知ってるんですか？」

予想してなかったな、この展開は。

「まあな。ジュエルシードってーのは、旧世代の遺物、ロストロギア
ア的一种だ」

「ロストロギア？」

「ああ。様々な次元世界があるって話はしたよな？ 中には、文明が進歩しすぎて、その自分達の科学力の産物のせいで壊滅した世界が数多くある。そんな滅びた世界の残滓を総じて、ロストロギアって呼ばれてる。ジュエルシードも、その内の一つだ」

「……………」

「…………哀れだな」

ライナの言い分はもつともだ。恐らく滅びた世界の人々は、自分達の欲望の果てにそれだけのモノを作り、その危険性も考えないまま使い続けて、拳げ句の果てに滅びた。これを哀れと言わずして何と言うのか。

「…………と言うことは、ジュエルシードもそれだけの危険性を…………？」

「だろうな。ヘタすりゃ、こんな地球なんつーちっぽけな世界、一瞬で滅ぼすなんざ造作もない事だろうよ、ロストロギアにかかりやな」

「…………直哉。お前とその二人…………高町なのはとユーノ・スクライア…………だったか？ たったそれだけの人数で対処しようとしたのか？」

「まあ、な…………」

「…………はあ」

呆れるように、蔑むようにため息を吐くライナ。しばらく考えこむ

ように俯いた後、自分のデバイスを握り締めながら言う。

「わかった。手伝おう」

「ライナ……」

「……決まりだな」

そう言って、ニールさんは席を立つ。

「じゃ、明日つから特訓だ。ライナはデバイスの使い方。直哉は立ち回りを覚えてもらう。時間は貴重なんだ、明日に備えてさっさと寝ろよ、ガキ共」

明日から特訓。

その言葉の意味を頭の中で吟味しつつ、ライナに視線を向ける。

「……いいのか？」

「何がだ？」

「手伝いのこと」

「ああ。魔法の力が俺に無かったら諦めたが、どうやら俺にもちゃんと備わっているようだからな。使える時に使わないと、宝の持ち腐れにしかない」

「……ごめん」

「……どうした？　らしくないぞ？」

「ライナ、本当は関係無いはずなのに……」

「……ふっ」

僕の言葉に、ライナは僅かに……だが、優しげに微笑んで言う。

「気にするな……」家族”だろう？」

「……ああ」

『無論、我らも協力を惜しまぬぞ、直哉？』

『そうそう。遠慮とかすんじゃねえぞ？』

アルビオンとグリトラもそう言ってくれた。こんなに味方がいるなら、心強いことこの上無い。

「ありがとう、みんな」

翌日のPM4:30。

学校から戻った僕と、すでに準備万端なライナを連れて、ニールさんは近くの山の中の開けた場所に向かった。どうやら、ここを特訓の場にするらしい。

「そんじゃ、始めますか・・・”ケーニツヒ”、結界を」

『Yes, boss』

ニールさんが手に持ったカードに指示を出す。すると、僕らがいる場所一帯に結界が張られた。

「これで大丈夫だ。直哉、まずはお前からだ。デバイスを起こしな」

「はい」

一歩前に出て、イヴィに語りかける。

「行くぞ、イヴィ」

『オーライ、マスター』

「イーヴィルハート、セットアップ！」

『Stand by ready・set up』

僕の身体を光が包む。光が晴れると、僕はバリアジャケットを着込み、杖を構えていた。

「へえ。それが今の姿か、イーヴィルハート」

「『？』」

「いや、なんでもねえ・・・次は俺達だな。行くぞ、ケーニツヒ」

『Yes・boss』

「ケーニツヒ、セットアップ」

『set up』

途端、ニールさんの身体を光が包む。それが晴れると、そこには朱色のローブの様な服の上から軽鎧を装着し、手には同じく柄と刃が朱色の両刃の斧を握ったニールさんがいた。

「それが、ニールさんの・・・？」

「ああ。俺の長年の相棒だ。名前は”ケーニツヒ”ってんだ」

『よろしく頼む』

「んじゃ、ラストだ。ライナ、起動させな」

僕、ニールさんがセットアップを済ませ、ライナに順番が回ってくる。

「起動させると言われても・・・一体どうすればいいんだ？」

「細かいことはいい。とにかく念じてみる。そうすりゃ、後はデバイスが勝手にやってくれる」

「・・・それで大丈夫なのか？」

『大丈夫です、問題ありません』

ライナの疑問に、デバイスが答える。

そういえば・・・。

「なあ、ライナ。そのデバイスの名前、なんていうんだ？」

「……そういえば、まだ知らないな」

「……ニールさん？」

これを持って来た張本人をジト目で見る。だが、当の本人はどこ吹く風といった様子で言う。

「俺あとづくに知ってるものと思ってたぞ？」

「んなわけないだろうが……」

待機形体のデバイスを見ながら、言葉を紡ぐライナ。

「……教えてはくれないのか？」

『私の名は既に失われた。主、貴方に与えて頂ける名であれば、喜んでその名で生きましよう』

「……そっか」

『……主よ』

そんなライナに、アルビオンとヴリトラが近寄る。

「？ なんだ？」

『そいつの形、何かに似てないかい、大将？』

「形？・・・そういえば・・・」

「確かに、何かに似て・・・あ」

「・・・そいつらの翼、だな」

そう。ライナが持っているデバイスの形は、アルビオンとヴリトラの翼の形に瓜二つだった。

「龍の翼・・・アルビオンとヴリトラ・・・神龍・・・」

「・・・」

「・・・決めた」

しばらくの沈黙の後、意を決したように、ライナが顔を上げる。

「お前は龍を、神龍すら統べる者・・・龍の中の龍・・・」

ライナの言葉の一言一言に、銀色の翼は反応し、淡く、そして強く輝きを増していく。

「お前の名前は・・・」
”ドラグーン”

瞬間、デバイス……ドラグーンが一際大きく輝き、ライナの足下に魔方陣が現れる。

「なんだ、あの魔方陣……僕達とは違う……？」

ライナの足下に広がる魔方陣は、僕やなのは、ニールさんみたいな四角形を二つ重ねたような魔方陣とは違い、大きな三角形が一つあり、その角のそれぞれに円形の模様がある魔方陣だった。

「……なるほどな……こいつあ思わぬ発見だ……」

S i d eライナ

『名称設定を確認。以降、機体の名を”ドラグーン”で固定。主、”ライナ”に対する、全システムの最適化を開始。完了まで180秒を要します』

耳、聴覚を通して、俺の頭の中に直接ドラグーンの声が響く。同時に、俺の心に浮かぶ一つの違和感。

(俺は……この感覚を知っている……?)

こんな感覚を感じた覚えは無い。

そう、無いはずなのに、なぜか懐かしさを感じる。

(アルビオンやヴリトラですら知らない事に、関係があるのか……?)

俺が保護された時には既に一緒にた”ふたり”。だが、そんな”ふたり”ですら俺についてわからないと言う。

(俺は一体・・・何者なんだ・・・?)

『システムの最適化、完了。いつでもいけます、主』

「!?!? あ・・・そ、そうか」

思考に没頭する内、いつの間にかドラグーンの方の準備が完了したらしい。

後はわかる。直哉やニールのやり方を見ていたからな。

「・・・・・・・・やるぞ」

『了解』

「ドラグーン！ セットアップ!!!」

『Stand by ready・set up』

俺の身体を光と魔力が包む。そして、その光は形を成し、俺の身体

に纏わりつくくと、鎧の形をとる。

眼を開くと、最初に視界に飛び込んだのは純白。

俺の身体は実にシンプルな、身体の各所を申し訳程度に覆い隠すだけの、簡素な純白の鎧に包まれているが、左手だけは重厚な籠手が着けられ、手の甲には、銀色の球体のはまっている。

「・・・なんだか」

「地味だな・・・」

正面に立つ二人からの評価。だが、俺の頭は何かあるのでは、と考えていた。

「・・・ドラグーン」

『承知しています。この姿は土台に過ぎません』

「土台・・・？」

直哉がドラグーンという言葉に疑問を持つ。

『そう。この姿は所詮、土台だ。真に戦いの為の姿は・・・言葉よりも見た方が早いだろう。すまないが、白い龍・・・アルビオン』

『む？ 我か？』

『そつだ。こちらへ』

『むう……』

「アルビオン、頼む」

『我が主の命であれば……』

そう言って、アルビオンが近づいてくる。

『……よし。では、私の核に』

ドラグーンがそう言うと、アルビオンは俺の左手の甲……銀色に光る、ドラグーンのコアに乗る。

『では、主……”融合”と』

「融合？」

『そうです』

「……」

『主……』

アルビオンが心配そうに声をかけてくる。

「……大丈夫だ、やるぞ」

『……承知』

「アルビオン……融合!!」

『Fusion』

『?! じ、これは……!』

次の瞬間、アルビオンは粒子状に拡散し、俺の周りに展開する。それが俺の身体を包みこむと、さっきまでとは違う形状の鎧を形作っていく。

それが治まると、俺の全てが変わっていた。

「……驚いた……こいつぁ……」

「まるで、龍だ……」

そう。俺の身体を包む鎧は、白色であることに変わりはないが、その形はまさに龍。それもアルビオンを模した様な形だった。

両肩には角を象った装飾があり、身体の所々には龍の鱗……甲殻の様に装飾が施されている。

両手両足は、龍の爪そのままの様に鋭く、それだけで武器になりそうだ。腰からは白い翼がそのまま広がり、頭には龍の頭部を象った兜が着いている。

だが、最も変化が顕著なのが、ドラグーンだった。

基礎の鎧の時は、左手を包む籠手とその手の甲にはまる球体だったが、今の形は槍。

銀色の球体は刃の中心にはまっていた。

「……アルビオン？」

「……大丈夫、です。意外にも意識はハッキリしています……主は？」

「俺も問題無い。なんだか、融合する前よりも力が満ちている感じがする……」

「成功のようですね」

「この状態が、俺達の戦闘形体……で、いいのか？」

「ええ」

力が溢れてくる……これが、俺の魔法の力……。

「準備完了、みたいだが……いいか、お前ら？」

「……ああ、大丈夫だ。アルビオン、ドラグーンも、行けるな？」

「『勿論です、主』」

「直哉？」

「僕も行けます。いいな、イヴィ？」

『はい』

「んじゃ、まずは簡単に動いて、身体にデバイスの感覚を馴染ませてもらおう。いきなり戦闘訓練なんかさせねえから安心しろ」

「はい」

「ああ」

そうしてその後は、俺と直哉、二人で辺りを動き回った。動く度に、俺も直哉も僅かではあるが、確実に力が全身に馴染み、動きが良くなっていくのを実感した。

Side直哉

一時間程動き回り、力が大体身体中に行き渡った所で、ニールさんからストップがかかる。

「よし。大体済んだと思うから、次のステップに移る。つっても、暗くなってきたから、時間は少ないけどな」

「わかりました」

「次は何をすればいい？」

「何、簡単さ」

そこで、一回言葉を切るニールさん。

「お前ら一回、飛んでみる」

「・・・・・・・・・・は？」

「いや、だから飛んでみるって」

「いやいやいや、何言ってるんですか、いきなり飛べとか」

「なんだ？ 仕事のストレスでついに頭沸いたか？」

「そうじゃねえよ！ ああもう、悪かったよ！ 確かに、いきなりそんな事言った俺が悪かったよ、チクシヨウ！！」

珍しく自分の非を認めたニールさん。

普段からこうだと良いのに……。

どうやら、飛んでみるというのは、魔法を使って空を飛ぶ事で、それが得意か不得意かで、僕らの得意とする場所での戦闘タイプ……つまり、空戦タイプか陸戦タイプかをはっきりさせるために言っただけらしい。

ちなみに、僕は少し練習しただけで、自由とは言えないまでも飛べるようになったため空戦、ライナは飛べないことも無いが、自由自在に飛べるようになるには時間がかかるとの事で、陸戦だと判断された。

「基本的な動き方なんかは覚えたな。んじゃ、総まとめとして、お前らにちよつとした”鬼ごっこ”をやってもらおう」

「「鬼ごっこ？」」

「ああ。今から俺が、遠距離攻撃用の魔法をお前らに撃つから、5

分間避け続ける。それだけでいい」

「……そんならなら……」

「ああ……まあ……」

「……言ったな？ んじゃ、ケーニツヒ。”ファング”を」

『Yes, boss』

「エナジーファング」

『Energy fang』

ニールさんとケーニツヒが魔法名を呼ぶと、ニールさんの周りに緋色の牙の様な魔力の刃が……え？

「……ねえ、ライナ」

「……なんだ？」

「あれ、いくつに見える？ 僕の目が正常なら、30は軽く越えてると思うんだけど……」

「安心しろ……俺もお前も、きっと正常だ……」

第六話「講義と特訓、龍騎士の目覚め」（後書き）

j「始まりましたよ、後書き座談会のコーナー。今回は、もう一人の主人公、ライナ君に来ていただきました」

ライナ（以下ラ）「前回とコーナー名変わってないか？」

j「いいじゃん。気にしない」

ラ「まあ、別にいいが・・・」

j「じゃ、やるっか、今回のおさらい」

j「てなわけで、今回はニールから二人の主人公へ管理局や魔法についての簡単な説明と君のセットアップだったね」

ラ「ああ。デバイス名がドラゲーン・・・安直だな」

j「うるせい。で？魔法に触れてみてどうだった？」

ラ「とにかく不思議だったな。あんな力があるのなら、使い方次第では繁栄も滅亡ももたらささるうな」

j「そうならないように、管理局がいるんだけどね」

ラ「ああ、だな」

ジ「んで、ラストは鬼ごっこだったんだけど・・・」

ラ「・・・あれは本気で死を覚悟した・・・」

ジ「大変だったね」

ラ「他人事だからって・・・まあ、いい。それにしても、最後の二
ールのセリフは・・・」

ジ「うん。知ってる人は知ってるあの傭兵のセリフ。ぶっちゃけ、
声はあんな感じを意識してるからね」

ラ「そうか。まあ、上手く書けているかは微妙だがな」

ジ「orz」

ラ「使い回しはやめる」

ジ「さて。第六話、如何だったでしょうか？」

ラ「誤字脱字、指摘される点や、ご意見ご感想があれば、ぜひ願
いします」

「ラ」ではまた、次回にお会いしましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4707y/>

魔法少女リリカルなのは ~ 憎悪の戦士と神龍の騎士 ~

2011年11月28日08時48分発行